

## 第1章 なぜ僕が紙の茶運び人形を作ったのか

### 1. The Doll with Red Dress

昭和30年代前半 まだ小学校に上がる前、我が家は戦前からあったような木造平屋建ての 隣の家と屋根を共有する長屋形式の借家だった。

軒下につるしたスダレ（もちろん夏の間だけだが）をはねあげ、縦長の格子にガラスの入った引き戸を開けると半畳ほどの土間の玄関だった。右側の下駄箱の上の父親がリング箱を解体して作り直した鳥小屋には、雛が生まれたり猫やねずみに殺されたりして増減を繰り返しながらも、いつも5～6羽のカナリヤがいた。靴を脱いで上がりがまちに上がり、真ん中に一枚だけガラスの入った障子戸をあけると、畳敷きの4畳半の部屋で 突き当りと左側がふすまの引き戸になっていた。突き当りのふすまを開けると2坪ほどの板敷きの台所で、右奥に便所（もちろん汲み取り式だ）、左奥には裏へ抜ける勝手口があった。4畳半の左のふすまを開けると、リビング兼ダイニング兼寝室の 半畳ほどの押入れと床の間のついた畳敷きの六畳間だった。家財道具はといえば、4畳半の部屋には座机と小ぶりのタンスそして水屋、六畳の部屋には、その上に我が家唯一の電化製品のラジオと、僕の初節句のお祝いに祖母がくれたという我が家とは不釣り合いにおおきなガラスケースに入った金太郎の人形（なぜか自分の背丈ほどもある真っ赤な鯉を釣り上げている）を乗せたタンスと、服を洋服賭けに吊るしたまま入れる形式の洋服ダンス（父親に怒られたときによく閉じ込められた）と、母親の鏡台、そして台所に木の冷蔵庫（そう夏の間だけ氷を入れて使うやつだ）ぐらいだったように記憶している。何しろ家電製品などというものはまだ一般庶民の家などには普及しておらず（少なくとも近所の家では見たことはなかった）、もちろん我が家にも何もなかった。

そんな何もないような我が家で、六畳間の鴨居の高さには父親手造りの棚が一間分ほど取り付けてあり、その上には我が家で唯一文化的な香りのする「平凡社世界名作全集」が並べられていた。上下を白と黒に塗り分け、黒地に白抜きの文字で題名の入った背表紙の外箱が並べられていた。何の娯楽もなかった当時、読書好きだった母親の唯一の楽しみだったということだろう。その名作全集の並べられた棚の上方には、講道館柔道四段という額と、父親の生まれ育った瀬戸内の島々を写した白黒の風景写真と、なんとなく父親に似た日本海軍のセーラー服を着た見知らぬ人物のセピア色？の写真が額に入れて吊るしてあった。それは誰なのか、なぜか聞いてはいけないような気がして聞けず、新しい家になりその写真も飾られなくなり、結局直接父親に聞く機会もなかったが、酔ったときの父親の話を総合すると、11人兄弟の8男だった父親の一番仲のよかった戦死してしまったすぐ上の兄ということらしかった。

その赤い服の人形は、会うこともなく死んでしまった伯父さんの写真と、柱時計（毎晩寝る前に父親がいつもぜんまいを巻いていた）に挟まれるように、「世界名作全集」の上にもいつも座っていた。それは何の変哲もない赤い服に赤い帽子の女の子のぬいぐるみの人形で、当時の小さい女の子なら誰でもひとつは持っているようなものだった。僕はその人形

には、時々 思いついたように柔道の相手をさせて投げ飛ばしたりして、今にも取れそうな手足の付け根から、詰め物の木毛のはみ出していたような記憶しかないのだが、母親などの話では、僕の記憶の以前の世界では、その赤い服の人形をいたく気に入っていて、よく連れ歩いて遊んでいたらしい。確かに 当時大流行したダッコチャン人形などを欲しがり買ってもらった記憶があり、人形やその類が子供のころから好きだったのかもしれない。それ以後人形を買ったり集めたりしたことはないのだが、今でも人形を見ると興味や関心が向くのは、記憶の以前の世界で遊んだその名前もない赤い服の人形とのことが、今でも心のどこかに残っているということなのかもしれない。

その赤い服の人形は、僕が小学校に上がり全く見向きもしなくなってからもしばらくは、「世界名作全集」の上に座り僕を毎日見下ろしていたような記憶もあるのだが、その後の行方はわからなくなってしまった。しかし 今でもその赤い服の人形は、棚の「世界名作全集」の上で、見下ろすように僕の記憶の中に座り続けている。

## 2. Robot of Empty Box

そんな人形への興味はいつしか当時の子供たちの間で流行っていたロボットへと移っていったのでした。山下の達ちゃんの歌ではないのですが、ご多分に漏れず僕もアトムの子になっていたのです。

アトムといってもテレビアニメではなく、まだ我が家にテレビがやってくる前のマンガ本の中のアトムでした。もちろんテレビアニメになってからも毎週欠かさずに見て、マーブルチョコレートのおまけのシールなども熱心に集めたりはしたのですが、今も記憶の中により強く残っているのはマンガ本の中のアトムなのです。それはまだ週刊漫画雑誌が創刊される以前、誕生日やお正月にお小遣をもらったときに買った月刊「少年」で読んだものだったのか、床屋の待ち時間に読んだものだったのか、貸し本屋で借りて読んだものだったのか、記憶は定かではないのですが、「ゲルニカ」、「赤いねこ」、「ブラックルックス」などなのです。もちろん「ロボイド」、「地上最大のロボット」なども大好きで、登場するキャラは今でもみんな覚えているのですが・・・。

食用の為に、巨大化させたエスカルゴが暴れだし、あらゆる兵器でも止められなくなった時、アトムが塩を撒くという原始的な方法でくい止めるという「ゲルニカ」、動物たちをつかって都市開発を阻止しようとして倒れた赤い猫面のテロリスト？が、実は武蔵野の自然を守ろうとした四足博士だったという「赤いねこ」、ロボットを



次々に破壊するロボット差別の秘密結社の党首が、実は孤児だった自分をロボットの養母が育ててくれたということを知ったアトム達が復元した養母のロボットの膝のぬくもりで知るといふ「ブラックルックス」、など寓意に満ちた話は、そのコマ割まで思い浮かべることができるのです。テレビアニメになってからの勧善懲悪的なアメリカンヒーローのようなアトムの活躍物語ではなく、人間の悲しみや愚かさを教えてくれたアトムがいたような気がするのですが・・・。

しかし人間の悲しみなど知りもせず、ただ愚かなほど無邪気なだけの子供だった当時の僕は、ただ単純にロボットが好きだったのです。それは、自分も天馬博士のような天才科学者になりたいと思っていたほど無知だったのです。だから毎日毎日 空箱を貼り合わせてロボットを作っていたのです。というより空箱を貼り合わせたものをロボットと呼んでいたというほうが正しいのかもしれませんが。たとえばサイコロキャラメル立方体の箱を頭として、牛乳石鹸の箱の胴体に貼り付け、手足はもちろんマーブルチョコレート円筒形の箱といったようなもので、キャラメルと石鹸とチョコレートの臭いが入り交ざった奇妙な臭いと同じくらい、奇妙なロボットだったのです。そんな中でも自慢のロボットは、段ボール箱を胴体にした大型のロボットで、頭の箱の目の位置をくりぬいて赤いセロハンを貼り中に豆電球をつけ、目が赤く光るというものでした。（配線が今のようにより線ではなくエナメル線で、エナメルがきれいに剥けず接触不良で思うようにはなかなか点灯しなかったのですが・・・。）またダンボールの胴体には、開閉する扉を切り抜き、中には小型のロボットが収納できるようになっていました。（これはゴミが出しっぱなしにならないという意味で母親にも好評でした。）

これらのロボットは、もちろん歩くわけでもなく、ましてやしゃべるわけでもなかったのです。そういう意味で当時の僕は、毎日空箱と話をしていただけだと思います。このロボットたちが、僕の記憶の中では、自分自身の手で作り出した初めての物だったように記憶しています。



## 写真の説明

### 写真1：鉄腕アトム

光文社カップコミックスから出た鉄腕アトムの単行本です。本棚の片隅で保存状態も悪く表紙などはボロボロになっていました。テレビアニメが始まってから出たものですが、鉄腕アトムのシリーズとしての単行本としては、初

期のものだと思います。僕は当時 本の帯としてついていたシールが欲しくて買った覚えがあります。

#### 写真2：空箱のロボット

昔を思い出しながら作ってみました。それにしても、「サイコロキャラメル」、「マーブルチョコレート」、「牛乳石鹸」がマイナーチェンジはしているものの、商品として40年以上も続いていたことに、ある種の感動を覚えました。

### 3. Paper Plane

空箱のロボットからも卒業し、小学生となった僕はプラモデルへとステップアップし、モーターの使い方なども覚え、高学年になるころには、今度は木箱のリモコンロボットなどを作っていました。テレビでは、ロボット博士などといわれた相沢氏のラジコンロボットが流行っていましたが、小学生には高価でとても手が出ず、もちろん知識もなく指をくわえて見ているだけでした。そして中学生になる頃には、メカ好きの少年が誰でも一度は辿る道として、当然のように飛行機へと興味が移っていきました。そこでも当然ラジコンなどは夢のまた夢で、もっぱら模型雑誌にのっているハンドグライダーなどを作っていました。紙製のグライダーから木製のグライダーへとステップアップしてはいたのですが、近所には十分飛ばせる広い場所もなく、家々の屋根に不時着してしまうケースも多く、コストの安いペーパーグライダーがメインでした。

そんなある日、学校帰りに近所の文房具屋で偶然紙飛行機のスケールモデル集を見つけ、早速買って帰りました。それは第二次世界大戦で活躍した世界各国の戦闘機、メッサーシュミット、スピットファイア、ムスタング、ゼロ戦、飛燕などを中心に十機種がセットになったものでした。とりあえず一機を作ってみたのですが、紙なのにスケール観もありバランスさえとればそれなりに飛ばすこともでき、すぐに夢中になってしまいました。しかしそのまま作ってしまうとすぐに終わってしまい、また買うといってもそれなりの値段がするので、そこで一計を案じたのでした。まずトレーシングペーパーに形を写し取り、それをカーボン紙を使ってケント紙に複写して作りたいだけ作るという作戦にでました。次々に作っては飛ばしているうちに、作り方もほぼ理解し、ちょっと改良して類似の機種を作ったり、塗装を変えてみたりして楽しんでいました。

そうこうしているうちに、当時最も好きだった世界初のジェット戦闘機メッサーシュミット



Me262 を作ってみようと思い立ちました。セットの中のメッサーシュミットを改良し、両翼の下にオリジナルのジェットエンジンなどを取り付け、なかなかいい出来だと自己満足していました。しかし形ができると飛ばしてみたくなったのです。プロペラ機には、ゴム動力をつけプロペラを回しながら滑空させて遊んでみて、紙の機体は重すぎて動力飛行は無理だとわかっていたので、ジェット推進ならと思ったのです。当時ロケッティという模型飛行機用の固形燃料のロケット式推進器があったのです。アルミ製のタンクの中に固形燃料を入れ導火線で点火すると、タンク後方のノズルから燃焼ガスが噴出し、それを推進力にするといったものでした。当初その燃料だけを使いタンクを自作しようとしたのですが、しょせん中学生にも加工できるプラスチックや木では、そんな熱や圧力に耐えられる軽量容器は作れず、それならば飛ばすだけでもとロケッティを直接つけて飛ばしてみることになりました。機体を自作のカタパルトにセットし、人の来ないのを見計らって点火すると、すばらしい勢いで飛び上がりました。しかし同時に血の気が引きました。その勢いで飛んで行ってどこかの家にでも飛び込んだら大変なことになると気がついたのです。しかし幸いにも7～8m 飛んだところで突然主翼の付け根から二つに折れ、万歳をしたようなかっこうであえなく墜落したのです。当然各部には補強がしてあったのですが、しょせん紙飛行機ということでロケッティの推力に耐えられなかったということでしょう。また機体がメッサーシュミットだったのが幸いして主翼が折れて墜落したからよかったものの、もしジェット戦闘機のように後退翼や三角翼だったりしたらと肝を冷やしました。

その後は、これに懲りて飛ばすのは手投げレベルとし、少しずつオリジナルなものへと移行していったのです。そんな時 飛行機の雑誌に「紙飛行機野郎会」？会員募集という記事を見つけすぐに入りたいとは思ったのですが、中学生だったこともありなかなか決心がつかず、やっと思い切って入会を申し込んだときには、すでに募集は締め切ったとの連絡だけが帰ってきました。その後受験もあり紙飛行機からもいつの間にか遠ざかってしまいましたが、それが僕のペーパーモデルとの初めての出会いだったように思います。

## 写真の説明

### 写真1：十八試局地戦闘機「震電」

メッサーシュミット Me262 は手に入らなかったため、次に好きだった震電を集文社さんのペーパーモデルミニシリーズの中から作ってみました。震電は、飛行速度の向上と、重武装による迎撃力の向上を目指して作られた唯一の先尾翼機です。試験飛行には成功したものの、三日後には終戦となり、ひのめを見なかった幻の戦闘機です。そのユニークな姿もさることながら、そんなお話も含めて好きだった機体です。

#### 4. KARAKURI

記憶のどこかにある赤い服の人形のせいか、大人になっても人形には興味を持っていたのですが、人形が好きだなどという白い目で見られるので、そのような言動は控えていました。しかしチャンスがあれば一度辻村ジュサブロー氏、四谷シモン氏、与勇輝氏などの人形を見てみたいとは思っていました。そんな折 母親が友人と銀座の松屋で開かれていた与氏の人形展に行き 買って来た写真集を見て、どうしても実物を見たくなり意を決して行くことにしました。ある程度は覚悟して行ったのですが、その場違いな雰囲気には圧倒され落ちて見ることができませんでした。しかし人形たちは一目見れば静止したまま生きていることがわかりました。こういうことを言うので白い目で見られるというのはわかっているのですが、本当かなと少しでも思っていただけの方は、川口湖畔にできた与氏の人形を常設展示しているミュージアムを訪ねてみることをお勧めします。ここはデパートの人形展のように、まるでアイドルのグループのようなオバサマ方に邪魔されることもなく、静かに人形と向き合うことができます。ちょっと話がそれてしまいましたが、その人形展以来、自分でも何とか人形を作りたいと思うようになっていました。

そんなある日、NHK 教育テレビの趣味講座で与氏がじきじきに人形製作の講座を行うことを知り、早速テキストを買いビデオを用意し、週に一度の講座を楽しみに欠かさず見たのは言うまでもありません。と同時に材料を探し回って集めすぐに作り始めました。

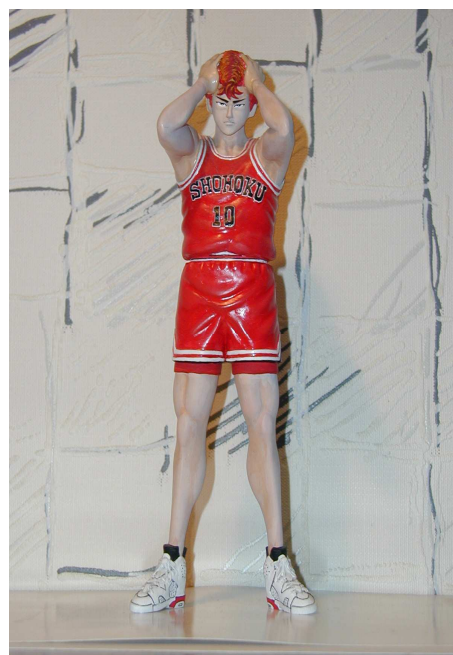
油土で頭部の原型を作り、石膏で型を取り、型の内側から張り子紙を重ねるように貼り、張り子の顔を作る。体はテキストから型紙を写し取り、天竺に型を取って裁断し、部屋の片隅で埃をかぶっていた足踏み式ミシンを引っ張り出してきて縫い合わせ、木毛を詰める。手足と頭を取り付けて、顔には染粉で肌色に染めたメリヤスをコテで貼る。靴は張り子の上に皮を貼り細く切った紐を通す。服は型紙をもとに布を裁断し、シャツ、ズボン、ジャケットと人の着る服と同じ手順で縫っていく。最後に 染粉で染めた糸を髪の毛のように貼っていき、髪をカットし目を描き入れて完成となる。そんな調子でテキストに載っていた二体の習作は夢中で作ったのでした。

ほとんどゼロからすべてのものを作り出していく面白さにはまってしまい、その後数年間に何体かの人形を作っては壊したりということを繰り返していましたが、とても自分にはあんな生きているような人形は作れそうもないということに気がつき、それならばいっそ動かしてみたらと考えました。そこで思いついたのがからくり人形だったので、か



らくり人形といってもイメージだけで、具体的にどのようなものかわからずとりあえず資料を探してみようと図書館や本屋をまわってみました。まだインターネットなどという便利なものはなく、今のようなロボットブームでからくり人形がいろいろな場所で紹介される以前で、茶運人形の外観や簡単な動きを説明したものや、飛騨高山の山車からくりが載っているものぐらいしかありませんでした。そんな中ちょっと古い本なのですが「ものど人間の文化史」というシリーズの中に「からくり」（立川昭二著、法政大学出版局）という本を見つけました。この本には日本のからくり人形を巡る話や、Automataの話、そして江戸時代に細川頼直によって書かれた「機巧図彙」の話が載っており、また「機巧図彙」に基づく茶運人形の復元の話も載っていました。江戸時代からくりについて書かれた本があることなど初めて知り驚くとともに、大変感動しました。特に茶運人形は、動力を内蔵し、速度と走行軌跡を制御しながら走行するという現在のロボットにも通じる機能を最もシンプルな形で具現しているようにも思え、ぜひ自分でも作りたいと思ったのですが、All木製のその人形を作るには、それなりの木工技術と工具等が要るように思え実行できませんでした。そこで自分の作った人形にモーターやギヤを組み込んで動かしてみたりしていたのですが、それでは結局部品を買ってきて組み合わせただけで、布人形を作るときのようなゼロからすべてを作るというような感激は味わえませんでした。

その後人形作りからフィギュアへと発展し、ワンフェスにも出展しようなどと画策したのですが、著作権がおりず断念しました。そんなことをしているうちに何故かフィギュアが大ブレイクし、オタク系の趣味がメジャーになっていくにつれ、逆に僕はフィギュアから離れていってしまいました。昨今の海洋堂のフィギュアにコレクターが群がっている様子には隔世の感があります。このようにして僕は人形作りからも遠ざかってしまったのですが、何かをゼロから作り出す面白さと、いつかはからくり人形を作ってみたいという思いだけが残ったのでした。



## 写真の説明

### 写真1：ピエロ

NHK教育テレビで与勇輝先生（私にとっては勝手ながら人形作りの先生なのです）が人形作りの講座を行ったときの、習作として作ったものです。

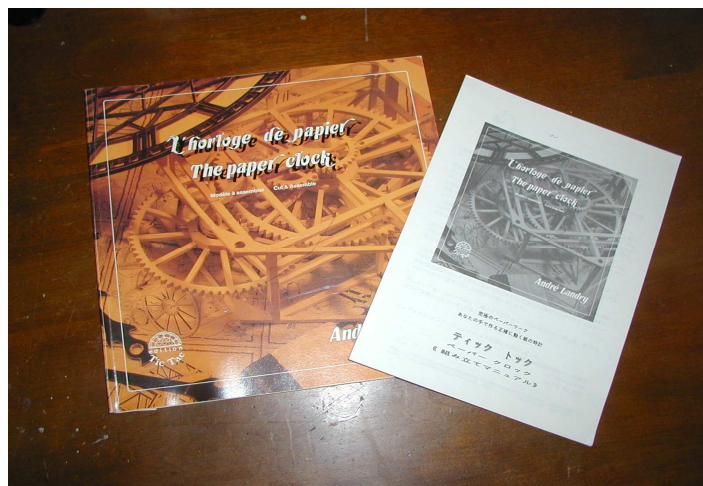
### 写真2：桜木花道

よくいつも見ていたアニメのスラムダンクの主人公「桜木花道」をフルスクラッチで作ったものです。エンディングテーマだった、WANDSの「世界が終わるまでは」が好きで、CDを買ったときについてきたイラストをもとに作りました。

## 5. The Paper Clock

20数年前、渋谷に東急ハンズができた時から、何かを作ろうと思い立ったときには、材料や工具を探しによくでかけていました。僕のような素人が何かをつくろうなどという場合には、ハンズに行けばほとんどの材料や工具は揃ってしまうのです。ここでハンズの宣伝をしても一銭にもなるわけではないのですが、すぐに何かを作りたいなどと思ってしまう僕のような人間には、とっても便利で、また見て回るだけでも楽しい所ということでよく行っているのです。その中でもプラモデルやおモチャを置いてあるフロアは、用がなくても必ずのぞいて見るフロアなのです。

その時も特に目的もなくそのフロアを見て回っていたのですが、ペーパークラフトのコーナーにペーパークロックとあるのを見つけて驚きました。ペーパークラフトというものは飛行機ぐらいしか作ったことはなく、あまりよく知らずただ飾っておくものだと思っていたので、さほど興味もなかったのです。そこで紙の時計といってもどうせ飾りだろう



と思って手に取ったのですが、宣伝文句には動くと書いてあるではないですか。それに写真を見ると複数の歯車やラチェットといった機械要素が組み合わさっており、確かに動きそうに見えたのでした。それは僕にとっては大きな衝撃でした。20年近くも（当時）機械の設計を生業としてきた僕にとって、紙で機械を作るなどということは青天の霹靂だったのです。もっと詳しく知りたいと思ったのですが、それはビニ本（今で言うマンガの単行本ですかね）のように本全体がラップされていて、中は見えないようになっていたのです。これは買うしかないと思ったのですが、価格を見ると7000円もするではないですか、一瞬ためらいましたがレジに直行しました。

早速家に帰って開けてみたのですが、最初の印象は、組み立ての説明が別刷りの5~6ページしかなく、これでできるのだろうかということでした。説明書の序文には、この時計を作るに当たっては、何度も試行錯誤を繰り返し、動くようになるまでには数年かかったというようなことが書いてあり、それはそうだろうと思ったのですが、それにしては説



明書が淡白だなという印象でした。そしてもうひとつ感じたことは、時計の原理も動きもよく知らない僕が、はたして動くように組み立てられるのだろうかという疑問でした。まあ作る前からとやかく考えても仕方ないのでとりあえず作り始めました。簡潔にすぎる説明を想像で補いながら、作者と同様試行錯誤で作るような状態でしたが、直径200mmを超えるような台形歯型の歯車などの機械要素が紙でできる驚きと、それだけでも十分美しい歯車などに感動しました。しかしその喜びも長くは続かず、各機械要素を組み立てる段になってハタと困ってしまいました。歯車の組み合わせも1個2個ならば、軸間距離の調整でなんとかなるのですが、同軸上の歯車を複数個組み合わせるとなると、あちらを立てればこちらが立たず状態で、歯車のちょっとした工作上的ハズ歯状のズレが、組み合わせるといかんともしがたいズレとなり、歯車がスムーズに回転しないといった状態になってしまいました。しかし歯車を作り直すにはもう1セット買うしかなく……。とりあえず動かすことはひとまずおいておき、最後まで組み立ててみました。できしてみると歯車などの機械部品がデザインに組み込まれているように美しいもので、飾りのペーパークラフトとしてのみ見ても僕としては満足のいくものでした。しかしこれが動いたらという思いは最後まで残りました。

動かなかったのは自分の技術のいたらなかったことかもしれませんが、作っているうちに紙で機械を作る場合の問題点もいくつか見えてきました。第一に 紙で機械部品を作るにはやはり限界があり、それを考慮した設計が必要だろうということでした。たとえば歯車などは、歯型の精度に製作上どうしても限界があるので、歯車を組み合わせるには組み立て上歯車の軸間距離が調整できる構造が必要だろうということなどです。そのため時計などのように、同軸上にいくつかの歯車をセットしなければならない構造のものは、題材そのものに限界があるということです。構造上やもう得ない場合は、各部品をいくつか作れるようにして、その中から精度の良いものを選ぶようにするという位でなければ、時計のようなものは難しいだろうということです。(昨今なら CD-ROM でもつけるということでしょうか。) 第二に 動くものとなると、その原理や動きそのものが理解できなければ、組み立てや調整が難しいだろうということでした。この時計にしても調速機の部分などは、機械がメカトロ化している昨今ではほとんど見ることをできないもので、それを調べるのも製作上の楽しみの一つだというレベルの人でなければ作るのは難しいだろうということです。

しかし そんな不満や問題点など全て帳消しにしてまだ余りあるほどの驚きと感動と楽しさをこの紙の時計は僕に感じさせてくれました。「紙で機械を作る。」これは僕にとって目からウロコ状態だったのです。この時はまだ自分で何かを作ってみようとは思わなかったのですが、いくつか解決すべき問題点はあるものの、そこを工夫すれば機械を紙で作れる可能性があることを この紙の時計は僕に教えてくれました。

## 写真の説明

## 写真 1 ; The Paper Clock

カナダの IMDEX INTERNATIONAL 社から出されている、紙の時計のペーパーモデルです。アンドレ ランドリー氏により、カナダの首都オタワにある国会議事堂のピースタワーにある時計を模したものだそうです。

## 6 . HONDA P 2

ホンダが2足歩行のロボット作ったという NHK のニュースを聞いたとき、二つのことで驚きました。一つはホンダがロボットを作ったという驚きと、もう一つは筑波の万博以来2足歩行のロボットがニュースになったという驚きでした。

今から25年ほど前、ちょうど僕が大学を卒業したオイルショックの頃、日本の各企業では、ユニメーション社の極座標型ロボットをきっかけに産業用ロボットの開発がブームになっていました。アトムの子としては、当然そのようなことをやってみたいとは思いつつも、降ってわいたような就職難になんとか機械設計の仕事についたものの、次々と新しい産業用ロボットが開発され、日産のシャーシの溶接ラインを筆頭に、ロボットを使った生産ラインが各企業の生産現場に導入されていく様子を横目で見ていただけでした。

そんな頃筑波で科学万博が開かれ、科学技術と知識の習得のためと称して、会社の先輩と有休をとって平日に筑波まで出かけていったのでした。その時最も印象に残ったのが、早稲田大学加藤研究室のロボット技術を中心とした2足歩行ロボットでした。それはメカむき出しの大きな2本の足に腰にあたるような四角い箱をのせた下肢だけのロボットでした。その足だけのようなロボットが、制御や動力のための配線を天井からワイヤーで吊ったものを引きずりながらノソリ、ノソリと歩くというものでした。ロボットというイメージからはほど遠いものでしたが、裏を返せば非常にロボットらしく 歩く姿はある意味感動モノでした。それ以来ロボット技術と呼ばれる分野では、それなりの進展が見られたのにもかかわらず、2足歩行の技術は筑波博以来ほとんど進展が見られず、それ以上の進歩は難しいのではと思われていたときの、HONDAP2の発表だったのです。そのニュースが流れた何日か後、HONDAP2の少し腰を落としてスタスタ歩く姿が放映されたのを見たとき 背中がゾックとするくらいスゴイと感じました。その後自分でも実際に展示会でP3をみたりして感じたのは、P3のそのまま車の生産ラインで作れそうな製品設計としての完成度の高さと、そのようなロボットを採算も考えずに十年余りにわたって開発を続けてきたホンダという会社のスゴサでした。そんなことを思いながら自分のことに考えが及んだとき、それはやってきたのでした。当初 そんな仕事をやれている人は幸せだなあという程度の羨ましさだけだったのですが、これをきっかけに 今まで自分のやってきたことを振り返ったとき、そう久しぶりにやってきたのです季節外れの5月病が。

今までも何度かそんなことはあったのですが、この時になって今までも感じていた仕事の中でのいろいろな不満が思い起こされてきたのです。たとえば、納期に追われてろくに設計もできず、既存のコンポーネントを組み合わせて機能だけを満たしてでっち上げ

たような不恰好な装置ができてしまったときなど……。もともと僕のやっているような機械設計の仕事は、いわゆる生産ラインの自動化、省力化といったもので、最先端の機械技術を駆使して設計するようなものではありません。突き詰めれば、物を右から左へ移動させる、位置を決めるそれをせいぜい貼り合わせたり、熱圧着したりといった類のもので、機械要素を選択して組み合わせる機能を満たすといったものなのですが、最近はその拍車がかかり、各機能を持った部品がユニット化され、直線運動や回転運動をする機能を持ったコンポーネントを組み合わせるだけといった状況になってしまったということなのです。装置を買ってくださるお客さんが満足してくだされば会社としてはそれでよいのですが、僕にとっては設計したことにもならないのです。本当は布人形のように全てを自分で作ってみたいのです。

またある時は、生産ラインを更新した後、倉庫の片隅でビニールシートをかぶせられた自分が設計した装置を見つけたときなど……。ビニールシートをめくれば、金属やプラスチックで作られた装置は当然腐るわけでもなく、そこには作ったときとほとんどそのままの装置があるのです。何のことはない僕はただの産業廃棄物を作り出していただけなのです。そしてその装置が現役の時には、数秒間に一個という勢いで製品を作り続けていて、またそれがゴミの元になるわけで……。自分の小さいころからの興味や面白さの延長のように、機械を作ることを仕事としてきて、ふと客観的に考えたとき、実は作り続けてきた機械は、簡単に処分もできないような産業廃棄物であり、またそれが数秒に一個という勢いで産業廃棄物を吐き出し続けているのではないかという妄想の中から、自然に朽ち果てていく機械ができればなどと考えるようになっていました。

そんな取るに足りない小さな愚痴のような思いが積み重なって垂れ込めた日々の中、ある日突然空から光が差し込むようにそれは思いついたのでした。1998年7月29日、いつもの季節外れの5月病で20年以上も続けてきた機械の設計らしきお仕事に嫌気が差していたとき、ふと紙の時計を思い出したのでした。紙ならば原材料は木材で、ほっておけば朽ちて自然に帰るではありませんか。確かに何かの役に立つ機械などは作れませんが、逆に役に立つもの、つまりまた別のごみを生み出すものは作りたくないのです。そう思ったとき当然のように茶運人形を作ろうと思いました。茶運人形は最もシンプルな自立したロボットなのです。そして機構的にも各駆動軸が独立しており組み立て調整が可能なのです。また人形としてみれば、頭部は布人形の張り子で作れそうだし、着物も和紙で作れば全てが紙で作れるのです。これらのことを一瞬にして天啓のように思いついたとき、自分はこれを作るためにいろいろやってきたのかもしれないなどと思い込んでしまったのでした。その日から昔集めたからくり人形の資料を引っ張り出し、図面をひき、歯車など部品の展開図をケント紙に手書きでひき、試作してはやり直すといった日々が始まりました。その経緯はまた別の機会にということにして、途中一度断念しかけたものの、一年半の紆余曲折の末なんとか形になったのでした。そしてパソコンも手に入れ、HANDS 大賞の入選をきっかけに、これらを基にホームページMPMを立ち上げ現在に至ったしだいです。

子供のころの話から6回にもわたり長々とお話してきましたが、これが「僕が紙の茶運人形を作ったわけ」なのです。